

第50回慶應EU研究会 EU研究ワークショップ

2011年1月29日

「『EUの国際政治』再考 欧州統合史のアプローチから」

報告者： 細谷雄一（慶應義塾大学法学部准教授）

報告の成果と課題：

本報告では、2007年に刊行された共同研究『EUの国際政治』の議論を再検討する目的を持って、欧州統合史のアプローチから近年の研究動向を概観し、課題を提示した。『EUの国際政治』では、「国際政治の観点からEUをとらえ直すことが本書の目的である」（1頁）と書かれている。報告者は、本書の中で、「冷戦と欧州統合」と題して、欧州統合史と冷戦史の相関関係について歴史的に検討した。今回の報告では、それを基礎として、方法論的な研究動向の変遷にとりわけ焦点を当てることで、特徴と傾向を抽出することを試みた。

まず最初に、「日本における欧州統合史研究」について触れて、1980年刊行の田中俊郎「欧州統合の理念とその歴史的発展 欧州統合の歩み」（細谷千博・南義清編『欧州共同体（EC）の研究 政治力学の分析』新有堂）がはじめての学術的で体系的な日本語での欧州統合史研究となったことを論じた。その後、通史的研究としては94年のデレック・ヒーター『統一ヨーロッパへの道』（田中俊郎監訳、岩波書店）が理念の側面に光を当てて、96年の金丸輝男編『ヨーロッパ統合の政治史』（有斐閣）では指導者に焦点が当てられて欧州統合の歴史が論じられてきた。他方で80年代以降、ヨーロッパでは各国政府史料などを用いた本格的な欧州統合史研究が発展してきており、それらを反映した新しい通史として、遠藤乾編『ヨーロッパ統合史』（名古屋大学出版会）および史料集の遠藤乾編『原典ヨーロッパ統合史』（名古屋大学出版会）が2008年と2009年にそれぞれ刊行された。前者は2010年に中国語訳されて、アジアで幅広く読まれる画期的な通史研究といえる。

続いて、ヨーロッパにおける「欧州統合史研究の歴史」を概観した。重要な出発点は、連邦主義運動と非政府主体に注目した、ヴァルター・リプゲンスの研究である。続いて、政府史料を用いた画期的な研究として「国民国家（nation-states）」の重要性を強調するアラン・ミルウォード、社会経済史の重要性を強調するジェラルド・ボシユアらの研究があり、彼らは欧州統合史に関する欧州委員会のリエゾン委員会の中心的な歴史家でもある。次の新しい波は、アメリカの国際政治理論を応用したリベラル政府間主義のアンドリュー・モラブチック、脱国家的ネットワークに注目するヴォルフラム・カイザー、欧州委員会などの組織に注目する「超国家史（a supranational history）」を提唱するピアス・ルドローなどがあり、活動の中心となっている。また、冷戦史と欧州統合史の融合も、ルドローやジョルジュ＝アンリ・ストゥーを中心に進められている。

このように近年は研究も多角化が進み、多様な問題を扱っている。報告の最後には、これからの課題として、欧州統合史をグローバル化して、アジアとの関係についても取り上げる必要があると論じた。これは日本においても大きな役割を果たせるテーマであろう。